

タイトル:平成 29(2017)年度 教育セミナー(第 13 回)

日時:2017 年 9 月 14 日(木)~17 日(日)

場所:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3 階大会議室(303)

ハディ ハーニ (慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科)

筆者は学部時代からイスラエル/パレスチナ紛争に関する研究を継続してきたが、自分自身でも後ろめたさを感じるほどに、外部の研究会や学会への参加を積極的には行ってこなかった。そんな中、2013 年度に参加した先輩や指導教官からの勧めもあり、本セミナーへの参加を決めることとなった。

本セミナーに参加して特に意識していたことは、足場とすべきディシプリンや方法論といかに向き合うか、ということであった。筆者が所属する研究科では、研究を進めていく上で何らかの方法論や、依拠する理論・モデルなど、分析の枠組みを提示することはある意味で必須のことだった。しかしセミナーを受け終わった今、このことを振り返ると、そうした研究の枠組みにばかり捉われて、肝心の研究の中身の「厚み」がおろそかになっている部分もあったのではないかと反省している。筆者の場合は、そうした環境や、また同分野の専門家が不在な中で研究をしているという自覚から、「自分の視点、あるいは研究内容は遅れているのではないかと」という漠然とした不安があった。

同世代の研究者たちの研究発表や、先生方からの講義を受ける中では、ディシプリンと専門知識という、2 種類の側面での学びを得ることができたと感じる。普段は触れない地域の歴史や社会の有様を学びつつ、同時に、そうしたものに向き合うための視点や手法(ときには思い出話など)に対する理解を深めた。革命直後のイランでの調査、イスラエルの女性兵士研究、史料に乏しいカザフスタン研究、音符を交えての民族舞踊・音楽研究など、内容は多岐にわたった。それぞれが情熱をもってフィールドに向き合っていることに感動さえ覚えた。

それらを通じて、先述したような不安は次第になくなっていったと感じる。それぞれの研究者の環境や立場は多様であるが、何が優れているかというよりは、それぞれに一長一短でもあり、だからこそ多様性が引き立つのだろう。様々な分野、フィールドの研究者との交流の機会としても本セミナーが持つ意義は大きい。また質疑応答では自分自身の立場を活かすつもりで、自身の研究が抱える問題点にも引き付けながら議論することを心掛けた。例年より白熱したという質疑応答パートであったが、単に質問を投げかけるだけでなく、回答から学ぶことも多くあり、これからの研究に活かしていきたいと思う。本当に得難い機会であり、参加できたことに感謝したい。

それでも強いて欲を申し上げるとすれば、方法論や手法面に特化した講義や、また地域研究のみならず、イスラーム学(神学・法学)の専門家なども巻き込めるようになると、さらなる充実が期待できるのではないだろうか。

最後に、日本の若手中東研究者として、これほど充実した学びの機会を得られたことができ本当に良かったと感じています。共に議論を交わした研究者の皆様、先生方、また事務局の千葉さまをはじめ、この素晴らしい機会を用意して下さいましたすべての皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。